

ホテル学校だより

未来もずっと自然豊かなふるさとであるように

136 年の歴史に幕を下ろした鳥川小学校が、平成 24 年 4 月にホテル学校としてよみがえり、再び子どもたちの歓声や笑い声が戻ってきました。大人も子どもも一緒になってホテル



（平成 20 年「環境大臣賞」を受賞した鳥川小学校の児童たち）

を守ろう・自然を大切にしようと、学習や活動に取り組んでいる姿を見るにつけ、感慨深いものを感じます。私は閉校までの 6 年間、鳥川小学校に勤め、閉校後も鳥川の自然を守り育てる活動が継続していくようと、子どもたちと一緒に取り組んできました。とりわけ、平成 17 年の全国ホテル研究大会での発表を皮切りに、たった 10 名足らずの子どもたちが、愛知ホテルの会、矢作川環境技術研究会、子ども環境フォーラムなど様々な場所へ出掛け、「鳥川の自然をみんなで守っていこう」と訴えてきました。その訴えはついに環境省まで届き、平成 20 年には「こどもホタルレンジャー」で環境大臣賞をいただくまでになりました。子どもたちのふるさとを思う気持ちが多くの方の心に響き、今、その思いがホテル学校の取り組みへとつながっていることを実感します。私たちの取り組みの目的は決して



（平成 17 年「全国ホテル研究大会」での発表）

的に一歩ずつ近づいていると大いに手応えを感じています。ぜひ、多くの方にこの取り組みに参加していただきたいと願っています。（前鳥川小学校・現豊富小学校教諭 竹内 謙作）

ホテルだけを守ることではなく、ホテルの保護活動を通して里山の環境を豊かにし、きれいな水を下流域へ届けること、そして、未来もずっとこのふるさとが自然豊かで、恵みをもたらしてくれるように、みんなで守っていくことが最大の目的でした。その目的

ホテル学校歳時記（No. 3）

予知能力を備え持つメスボタルの苦闘

例年、6 月中旬はメスボタルの産卵活動の最盛期である。思い出されるのが祖母の口癖「虫の知らせがあつてのう」の日常会話である。これは「予告」であり「予知」である。交尾を完了したメスボタルは、午後 10 時頃から産卵場所を求めて飛翔を開始する。産卵場所となるコケは右岸・左岸のどちらにもあるが、「西日が当たらない川岸」が選択される。



（産卵する高さを変化させるメス）

問題は産卵された卵が全て確実に幼虫になれる確約である。「種」を継続するためにメスに課せられた重責である。オスにはこの「重責」はない。産下された卵は「30 日間積算温度 730 度」で幼虫の姿になる。厳しい自然界の条件を消化できる産卵場所は「温度良好、増水、濁流、乾燥無し」が必要である。ここで「メス」だけに与えられた能力が「予知能力」である。

親からの教育も伝言も無い能力が小さな「細胞」の中に保存されているのである。平穏の産卵位置は水面から 20 cm 以下であるが、50 cm を超えた年の 80% が洪水の年であり、現在の天気予報より高度の確率であり、不思議な能力である。興味のある方はぜひ研究していただきたい。（全国ホテル研究会顧問・生田蜚保存会会長 古田 忠久）

講演会「光といのち」を開催

6月7日（土）、講演会「光といのち」を開催しました。講師は、名古屋工業大学大学院工学研究科教授の神取秀樹氏です。神取氏は「光受容タンパク質におけるエネルギー変換・情報交換の機構解明」について研究されており、生物が光をどのように利用しているのかなど、段階的に分かりやすくお話していただきました。



（「光」とは何か「命」とは何かを語る神取氏）

また、オワンクラゲやゲンジボタルの発光についてもふれられ、発光のメカニズムを医療分野などに応用し、特定のガン細胞を光らせて発見するなど、未知の領域であった生物の能力の応用が期待される時代へと突入してきました。

賑やかに開催！鳥川ホタルまつり

6月14日（土）、鳥川ホタルまつりイベントが開催されました。昨年、一昨年と雨に降られたイベントでしたが、この日は最高の天気にも恵まれ、1,000人を超える人たちで賑わいました。



（クイズなどを交えて講演される秋元氏）

「ホタルのふしぎ」と題した講演では、岡崎市上下水道局水道浄水課の秋元義也氏からクイズなどを交えたホタルについてのお話をしていただき、謎に満ちた知られざるホタルの生

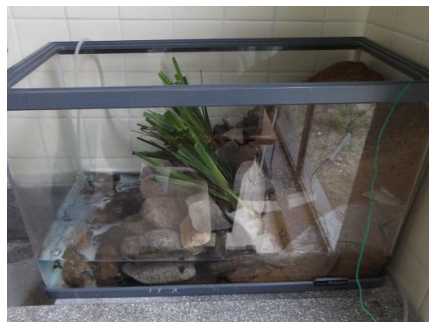
態や観賞マナーなどについて語っていただきました。

また、コンサートでは八丈島出身のシンガー「Kaname」さんや「岡森フォレストーズ」の皆さんが登場し、会場を盛り上げてくれました。また、鳥川町特製の「猪汁」も美味しくいただきました。



（この日のホタルの数も1,000匹超え）

未知の世界を「ホタル飼育室」で見よう！



（ゲンジボタルの幼虫上陸装置）

6月になると、鳥川町の川沿いにはゲンジボタルが乱舞し、私たちの目を楽しませ、心を和ませてくれます。ゲンジボタルの一生は約1年で、卵から幼虫になり約9か月間を川の中で過ごし、カワニナをたくさん食べて（およそ60個）体力をつけていきます。幼虫は、4月中旬から下旬の雨が降る夜に上陸し、土手の土の中で繭（マユ）を作ってサナギになります。自然界で卵からサナギに成長する様子を、私たちは見ることはまず不可能です。

そこで、ホタル学校では1階の「ホタル飼育室」でゲンジボタルの幼虫や、幼虫の餌となるカワニナ（水生巻貝の一種）を年間を通じて育て、ホ

タルの成育の様子を間近で観察できるようにしています。ホタルがサナギになる時期には、謎に包まれたその様子を観察するため、水槽を利用して人工的にホタルの幼虫上陸装置を作り、幼虫を15匹ほど入れます。上陸の様子、サナギの状態、羽化の様子などが観察でき、ホタルなど多くの生き物の命を育む自然の力には驚かされるばかりです。（ホタル学校スタッフ）



（幼虫やカワニナを観察する子供たち）

【ホタル学校に関する情報はホームページ・ブログをご覧ください！】

★ホームページ…http://www.morinoeki.jp/hotaru_gakkou/index.html

★水とみどりの森の駅ブログ…<http://sizentaikennomori.boon-log.com>